

黒瀬先生の実践と〈第三項〉論を踏まえて臨む授業について考えていること

1 困った質問を引き受ける

資料 P6「〈機能としての語り手〉の領域を問題化する田中の読みが子供たちの初読の感想の困った質問を引き受け、授業を展開するうえで決定的に重要」という黒瀬先生の指摘の通りと私も考えている。「困った質問を引き受ける」とは読み手の読んだ世界を中心に据えて授業を仕組むことである。読み手の読む必然性、主体性を大切にするようになる。ストーリーは〈語り手〉によって語られたことととらえ、〈語り〉そのものを意識して授業をすると、読み手は〈語り〉について批評をすることになる。批評の根拠は自分自身なので、批評をすることが自分の問題と向き合うことになる。

2 新たな正解主義に陥らないために

授業者の想いや読みが新たな正解主義と受け取られがちになる。

資料 P11「『わたし』とハッコちゃんの分身関係をとらえることが『あるひあるとき』の読みの第一の急所だと考える。」と述べ、「『わたし』とハッコちゃんの関係について幼い『わたし』とハッコちゃんの魂に触れた」ことを読むことをねらっているように受け取れる。P24の「ハッコちゃんと同じ存在」P29の「さらに深堀していく必要がある」などが授業の方向として意識されていたように受け取れる。これは P14 田中氏の論考の引用からわかるように黒瀬先生は「一つになっていく魂の問題」を問題にしていたのではないかと。

P32の「なんでちょっとなのかな」について授業で取り上げているが、C4は大切な物を燃やさなければならぬことに抵抗している。大切な物をちょっと泣いただけで渡すことはとても不自然なことだ。「戦争に負けて」「身一つ」で逃げるように帰ってこなければならなかった「わたし」は自分が助かるためにはハッコちゃんを手放さなければならなかった。「わたし」は「ちょっと泣いた」だけで「いよいよ明日出発という日」にあまり抵抗せず自分で手渡しているのである。自分が生き延びるために自分の分身とも言えるハッコちゃんを自らの手で父に渡したことに「人が生きる上で抱えずにいられない罪の問題が隠れている」(田中氏都留文科大学紀要第25集)のではないかと。ここに読み手の意識を問う問題があると考え。ただし、授業での取り扱いにはストーリー上の読みになるのでそのまま問いにせず、「ちょっとと書いてあることはどういうことを意味するのか」と課題にすると〈語り手〉への批評を問うことができると考えている。

3 授業のゴールと生徒の学びのみとり

『第三項理論が拓く小学校文学研究/文学教育』P182 須貝千里氏による『注文の多い料理店』の授業構想がとても参考になる。【教育の目的(人間性等)〈価値目標〉：(自己や世界、他者を)問い続ける。】

教材が異なっても〈第三項〉論を通して授業で子どもと追究していくことは同じだと考える。今回の授業で子どもたちが「AからAならざるものとしての再生を捉えている」(P62)と授業者はみとっている。授業者が子どもとの授業のなかで言葉ではなく感じる手応えでもある。